

10月8日、マスコミ各社がJR北海道におけるアルコール検査（アル検）の取り組みについて報道した。報道によれば、「検査体制を対外的に示し、乗客に安心して利用してもらう」ことを企図して、JR北海道は乗務員職場におけるアル検の確認状況を報道陣に初めて公開したようである。

一方、北海道の民放で同日放映されたニュースでは、そうした報道とはまったく異なる、JR北海道でのアル検に関する驚愕の実態が明らかにされた。何と、JR北海道では、過去に6回アルコール検査に引っ掛かったにも関わらず、運転士として乗務させ続けていたというのである！

JR北海道

アル検の驚愕の実態明らかに！

過去に6度の検査に引っ掛かった運転士が乗務を継続

また、そのニュースは次のような内容も報じていた。「若手を指導する立場の50代の運転士が3回アル検で乗務停止の数値を出し、指導のための添乗が出来ない事態を招いた。うち1回は車を運転すれば『酒気帯び運転』となる値であった。しかし、その後もこの運転士は指導員を続けていた」「この事について、（当該民放会社が）9月6日にJR北海道に会社の対応を問いただすと、1週間後の同月13日になって『乗務員として指導する立場としては問題があると考え、すでに指導担当から外している』との回答があったものの、実際はその運転士が指導員を外されたのは、回答があった前日の同月12日だった」。まるで、マスコミに指摘されそうになってはじめて転勤させたとも思えるような会社の対応だったとのことであった。

このニュース報道の後段でインタビューに応じた関西大学の安部誠治教授は、「(JR)他社だと運転士や車掌から降ろして他の業務に配置転換する。JR北海道は明らかに異常」との認識を示すとともに、「組合の指示で運転士が横を向くと安全運行に支障が出て会社は困る。『組合の言うことには穏便に』という風土が生まれた」とも続けた。

これまでにも、JR北海道は2013年の脱線事故やレール検査データの改ざん事件を発端として、北鉄労に阿るJR会社の態勢が国会等で繰り返し追及されており、この報道から見れば、JR北海道はいまだそうした労使癒着の構造を断ち切れていないのではなかろうか。

背景にはJR北海道における歪んだ労政が存在!?

こうした中、9月20日に発売された西岡研介氏の著書「『トラジャ』JR『革マル』三〇年の呪縛、労組の終焉」では、その半分がJR北海道問題で構成されている。著書のあとがきには、「本書の主たる目的は、今なお続く『JR北海道の異常な労使』の姿を、白日の下に晒すことにある」、「JR北海道が一日も早く『JR革マル』の呪縛から解放放たれることを願い」と記述されている。

北海道における鉄道の在り方について、北海道や沿線自治体、さらには国政の場で今後ますます論議が深まっていくだろう。将来の国土形成を形作る上で極めて重要な論議である。しかし、その論議の前提として、北海道内の鉄道運行を掌るJR北海道において正常な企業運営が営めるよう、歪んだ労使関係からの脱却こそが何よりも必要ではないのか？

北鉄労との癒着を断ち切る決断を！